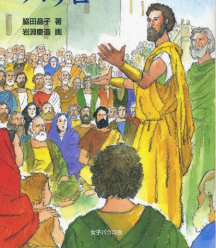


キリストの使徒 パウロ

藤田晶子 著
岩瀬慶彦 画



キリストの使徒 パウロ

藤田島子 著
岩淵慶造 画



女子パウロ会

ルネサンスの生い立ちをルネサンスの歴史と見なす。

ルネサンスの歴史とはルネサンスの歴史である。

ルネサンスの歴史とはルネサンスの歴史である。

ルネサンスの歴史とはルネサンスの歴史である。

ルネサンスの歴史とはルネサンスの歴史である。

ルネサンスの歴史とはルネサンスの歴史である。

ルネサンスの歴史とはルネサンスの歴史である。

ルネサンスの歴史とはルネサンスの歴史である。

人はだれでも、一人だけで生まれ、一人で生きていくのではなく、両親はもちろん、歴史のなかで、多くの人やできごととかかわりながら生きていくものです。

パウロという人を知るためには、かれがいのちをかけて伝えたようにしたイエス・キリストというかたを抜きにしては語れないし、意味もありません。イエスがあって、パウロがあるのです。そしてイエスを知るためには、新約聖書のなかの、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四人の書いた福音書を読む必要があるでしょう。

それでこの本は、イエスについていくらかでも知っている人たちに向かって書くことになりましたが、聖書そのものをまだむずかしいと思われるかたは、「旧約聖書物語」と「新約聖書物語」などであらすじ

を知っていただければ、と思います。

新約聖書そのものには、イエスの誕生からその死と復活までを語る福音書と、はじめのころの弟子たちのことばと行いを記した使徒言行録、そして弟子たちの手紙などが編んでいます。

この本では、弟子のなかでもとくにユダヤ人以外の人びとにキリストの福音を伝えた大使徒、パウロの生涯を、「使徒言行録」とパウロの手紙、教団の古くからの言い伝えなどもとにお話します。

ベトロとならんで、キリスト教会の二本の柱とも呼ばれるパウロ、イエスの教えを聖書にヨウにひろめるために船大の方を覚悟したパウロのことをぜひ知ってください。表紙の裏の地図を見ながら、パウロの足あとをたどってごらんになるのも、理解を助けるでしょう。そして、いつか聖書のなかのパウロの手紙をゆっくりと読み、学んでくださるように願っています。

パウロの生い立ちとステファノの殉教



國際都市タルソスに生まれたパウロ

パウロは、小アジア（アナトリア半島、いまのトルコ共和国）のキリキヤ州タルソスという町で、熱心なユダヤ教徒の家庭に生まれました。タルソスは、小アジアが地中海の東のはしでシリアに接するあたりの場所です。いまは、海から二十キロも入った小さな町にすぎませんが、パウロが生まれた当時は、世界でも一流の商業都市で、地中海からは美しいナドマス川をよかのはってさまざまな船が出入りし、青楼には、タウルス連隊をつらぬいて通りぬいた街道が、はるかローマにまで通じているのでした。

世界の物理がかわれると、しぜんに入びとも動き、多くの民族が入り交じって、そのころ二十万も人口があったといわれます。ユダヤ人（ユダヤ人とも、もちろんそのなかで大きなグループをつくっていました）

タルソスはまた、世界でも数おりの学園の町でした。哲学者が安ん、有名な教師がここから何人も出ています。

西風は、この町で風俗習慣を営んでいました。この地方でたくさん飼っているやぎの毛を使って、キリキヤ織りというじょうぶな衣類をや、じゅうたん、マントなどを織り出るのであるのです。そして、その仕事でかなり成功した金持ちだったのでしよう。ローマの市民

権まで手に入っていましたから、パウロが生まれながらにひきつてくることになったこのローマの市民権は、ローマ帝国に占領されているこの時代の国々ではたいへんな特権でした。たとえば、裁判なしにむち打たれるというようなこともありませんでしたし、地方の裁判所で文にいらなければ、ちよくせつローマ皇帝にうつたえることもできませんでした。たとえ犯罪をおかしても、市民であれば、十字架刑のようなひどい刑罰を宣告されることもなかったのです。

ユダヤの地をばなれて生きるユダヤ人は、ユダヤ名といっしょにたいいてい、外国人に呼びやすいローマふうのあまえもあっていて、パウロといふのはローマふうの名前です。家庭やユダヤ人仲間のみだでは、サウロと呼ばれていました。この本でも、しばらくこれをサウロと呼びましょう。

国際都市たる町でローマ市民権をもつかれの両親は、それでもこのこのファリサイ派でした。ファリサイ派というのは、ユダヤ教徒の中でもモーセの律法（元来、律法はモーセが神から授かかってイスラエルに伝えた、たいせつなおきて）を文字どおり、こまかく守って生活している人びとでした。けのきよく文字どおりということにこだわらぬあまり、ファリサイ派の多くの者が、イエスの自由な愛の精神についていくことができないで、イ

イスの反対者になつたのでしたか。

少年サウロは、この町でどんな教育を受けたのでしょうか。

両親はむすこをユダヤ人としてしっかりと教育しようと思つたにちがひありません。サウロは八日目に割礼の式を受け、ものごころつくど、すぐにモーセの律法や民衆の歴史の暗記を始めます。ユダヤ教会堂付属の学校に通つて、少し大きくなると、聖書だけでなくさまざまな口伝の教へも暗唱しなければなりませんでした。

そのうえに、サウロの両親は、むすこを律法学者にしようと思んだのです。律法学者というのは、モーセの律法をくわしく学んだユダヤ教の教員です。家族から一人の律法学者が出来ることはたいへん名誉に思われていました。

エルサレムには有名な教師たちがおおいいて、律法学者になりたい者は、そういう教師の一人について、何年もそのひざもとで勉強します。

ユダヤ人の男子は十二歳で宗廟上一人前と見なされますから、サウロもそれぐらいか、またはもう少し年長になつてからエルサレムに行つたのではないのでしょうか。かれは、いちばん有名なガマリエルという先生につきました。ガマリエルはとてもおもしろい心のひらき学者でした。だから、サウロもただこもこの聖徒書（聖書）だつたわけではありません。

ともかく、神に選ばれた民イスラエルだというほこりをもって、先祖の宗教をなによりもだいたいにし、どんな小さなことも神のみ教えにそむかないよう、まじめに生きる道徳とになりました。

サウロはたぶんイエスよりも五、六歳年下だったのではないでしょうか。イエスがおおやけに宣教師をなつたのは足かけ三年という長いあいだでした。サウロはそのころ聖書を熟読してケルソスに帰つたあとで、もうエルサレムにはいなかつたため、ちよくせつイエスの話を聞くこともなかつたのでしよう。

でも、回をなされたユダヤ人にとって、大きな誇りにエルサレムに還礼（還り）することはなによりのお喜びでしたから、サウロがまたエルサレムにすがたを見せるのは、誇りのときだつたかもしれません。ぐうぜん、そこでかかれたいへんな事件にであいます。

イエスの宣教師と十字架の死

数年まえのことですが、同の指導者たちはササレのイエスという人をとらへ、十字架にかけて殺しました。そのころのファリサイ派のよからに、モーセの律法（法律）にがんじがらめになつた人たちの教士にないで、イエスは神さまを「お父さん」と呼び、その愛を受け入